淺間の裾〔下〕

汀鷗

十月一日 晴

河を渡りて松原を寫す、午後より淺間を寫す、畑に鍬とりて働ける農夫の近く進み來りて「縣廳よりの御出張にや內務省よりにや」などうるさく問ひ「御苦勞樣」と叮嚀に挨拶して去りぬ、或人は「野天の御商賣でさぞ御辛いことで」と言はれしとか。

寫生終りて家へ歸れば三宅氏夫妻來りて我を待てり、我の歸りの遲かりしため、語らふ間もなく瀧車の時間せまれりとて本意なくも袂を分ちぬ、程なく丸山氏訪はれ二時ほど語りてわかれぬ。

暗き燈火のもとに、蒸し返せし粗飯の不味なるを、生ぬるき素湯に浮べて强て流しこみ、久戀の地にあらじと屢々嘆聲を洩しつゝ淋しき臥床に入りぬ。

二日 晴

淺間下しの風いと寒し、後の方高地より千曲川沿岸の大景を寫す、風强くして畫架を据へ難く頗る困しむ。午後よりは、千草亂るゝ岡の上の松一本を寫す、風致面白く、薄暮に到るも筆を收むるに忍びず。

三日 晴

朝も午後も昨日の寫生を續ぐ、夕景家に歸りて燈火つけんとするにはや石油盡きたり、物憂ければその儘にして眠りにつきぬ。

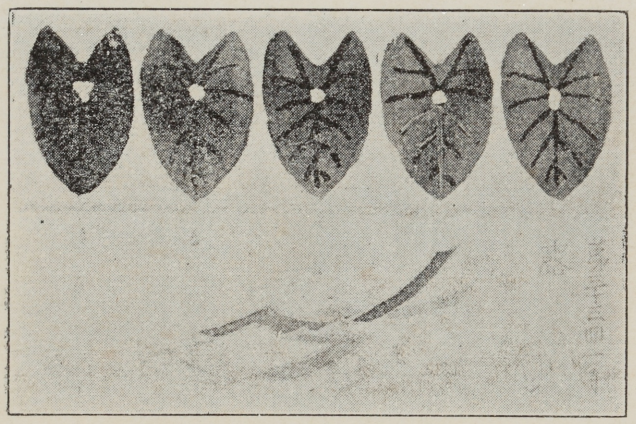
四日 晴

一昨日よりの場處を寫して漸く成れり、明日なほ一日近き景色を寫して歸京せんと思ひ、そのよし三宅丸山兩氏に通ず。

五日 曇より雨

起きいで見れば空は曇りて今にも雨ふらんさまなり、明日歸京の筈なりしもこの朝の一番列車にて歸る事とし、俄かに荷物を整へ出發す、我家に歸りつきしは五時に近く、久々にて香り高き綠茶に逢ふを得たりき。

（終り）



繪ハガキ競技會一等露

○眞の健筆は自然の精細なる觀察より來る

筆を達者に仕樣と云ふには、自然の細かい觀察と其感情を握るといふことが肝心である。世には實せ健筆といふ奴がある。今でもよく覺えてゐるが**サー、ジョンユア**と一緒に**オピー**の話をして居る時に「なぜ**オピー**はあのやうに細部を略して仕舞のか」と聞たら「大方健筆を見せたい爲でせう」と答へた。すると**ジョシュア**が「ハー、唯だ顏の一方を白くし一方を黑くして、それで健筆なら健筆は容易な者だ」と云つた。（**ノースコート**氏畫談）